

タバココナジラミ バイオタイプQの発生について

バイオタイプとは:

形態上ほとんど区別はできないが、遺伝子的、寄主植物への影響、薬剤の感受性等の生物学的性質が異なる系統のことであり、タバココナジラミでは、世界で約40種類の系統が確認されている。

1 発生の経緯

平成18年4月、県内で栽培されている施設トマトにおいて、オンシツコナジラミと形態の異なるコナジラミ類が発生した。

宮城県農業・園芸総合研究所 バイオテクノロジー開発部でPCR法により遺伝子診断を行った結果、タバココナジラミ バイオタイプQ (以下バイオタイプQ)であることが確認された。

国内では、平成17年2月に初めて報告され、その後西南暖地を中心に発生が拡大しているが、本県でのバイオタイプQの発生は初めてである。

2 発生状況

- (1) 発生作物 トマト
- (2) 害虫名 タバココナジラミ バイオタイプQ (*Bemisia tabaci* Q-biotype)
- (3) 栽培様式 施設栽培
- (4) 侵入経路 侵入経路は不明である。
- (5) 被害の様子 排せつ物によるすす病の発生が見られ、寄生の多い部分では果実の着色異常が見られた。トマト黄化葉巻病の症状はなく、ウイルス検定の結果トマト黄化葉巻ウイルスは確認されなかった。

3 形態、生態

- (1) バイオタイプについて

国内で確認されているタバココナジラミは、在来系統(バイオタイプ不明)、バイオタイプB(シルバーリーフコナジラミ)、バイオタイプQである。これらのバイオタイプに形態的な差はなく、肉眼での区別は困難である。

バイオタイプQは、スペイン、イタリア、中国等で確認されているが、詳細な生態は不明である。
- (2) 農作物への被害

排せつ物に発生するすす病による葉、果実の汚れ、吸汁による生育の遅れなどがある。また、バイオタイプBと同様に、**トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)** を媒介することが確認されており、**トマト**、**ミニトマト**に葉巻、萎縮、着果不良などの症状を起こす。**トマト黄化葉巻病** の発生は、国内で広がりを見せており、特に九州地方では深刻な問題となっている。
- (3) 形態について

成虫
体色は、淡黄色で白色の翅をもち、体長は0.8mm程度である。オンシツコナジラミと比較すると、体色は濃く、やや小型である。オンシツコナジラミは、葉面に静止しているとき、翅先が重なり合っているが、タバココナジラミは翅先が重ならない。

蛹
長さ0.8~1.0mm、体色は全体が淡黄色、楕円形で後端がやや細まる。背面はわずかに隆起しており、数本の対をなした長い刺毛がある。オンシツコナジラミは、体色が薄く、全体が膨らみ厚みを帯びたコロッケ状であり、刺状の分泌物が多いため区別できる。

卵、幼虫(1齢~3齢)、蛹(4年齢幼虫)を経て成虫となる。

露地での越冬は東北地方ではできないと考えられている。

オンシツコナジラミ (上:成虫,下:蛹)



タバココナジラミ バイオタイプQ(上:成虫,下:蛹)



(写真:病虫害防除所)

4 寄主植物

これまでに国内で確認されている植物は、以下のとおりであるが、寄主植物の範囲は広く、雑草等への寄生も確認されている。

ナス科: トマト, ミノトマト, ナス, ピーマン, パプリカ, シシトウ

ウリ科: キュウリ, メロン

シソ科: シソ, セージ

ヒルガオ科: かんしょ

アブラナ科: 茎ブロッコリー

ユリ科: アスパラガス

トウダイグサ科: ポインセチア

キク科: ガーベラ

アカネ科: ブーバルディア

5 防除対策 (平成18年度4月末現在)

- (1) 既に発生が確認されている地域から、苗の導入をする場合は、本種を持ち込まないように十分注意する。ウィルス病が疑われる苗、コナジラミ類の寄生がみられる苗は使用しない。
- (2) 施設における野菜、花き類では、施設の開口部に寒冷紗や防虫網(0.4mm以下)を張り、外部からの侵入を防ぐ。
- (3) 発生源となる可能性の高い植物は施設内に持ち込まない。また、施設内およびほ場周辺の除草を徹底する。
- (4) 主に幼虫や蛹の生息する下位葉は、生育に応じて葉かきをし、葉は土中に埋めるか焼却処分する。
- (5) 栽培終了後は、ハウスを密閉処理(蒸しこみ)や薬剤等により本種を死滅させ、ハウス外に分散させない。
- (6) 既発生地との報告によると、バイオタイプBと比較して、ネオニコチノイド系薬剤の一部、合成ピレスロイド系薬剤、ピリプロキシフェン剤等に対する感受性が低いことが確認されていることから、薬剤の効果に注意して使用する。
- (7) 特にローテープ(ピリプロキシフェン剤)の効果が著しく低下した場合は、バイオタイプQの可能性が高いので、最寄の指導機関に問い合わせる。
- (8) 同一系統薬剤の連用は、薬剤抵抗性を発達させる恐れがあるため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を徹底する。

(9) 下位葉や葉裏等にも生息しているため、薬剤散布においては葉裏まで薬液を十分に散布する。

(10) 薬剤の選定に当たっては、最新の農薬登録情報を確認し、ラベルに記載された内容を守って安全使用に努める。